

「名東図書館どくしょ会」 第3回 結果レポート

平成26年4月19日（土）10：30－12：00 名東図書館集会室

参加者 8名（一般）

進行 1名（名東図書館）

テーマ本 『お伽草紙』 太宰治/著

《あらすじ》

5歳の娘と一緒に防空壕に避難したお父さんは、娘にお話をする。それは、「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」といった昔話を、自分流にアレンジして語ったもの。「瘤取り」は性格の相違で幸不幸がきまり、亀との会話で話がすすむ「浦島さん」、40前の自堕落不潔性悪タヌキと処女ウサギの「カチカチ山」攻防戦、嫌いだった妻の残した金貨で宰相に上り詰めた遅咲き男の「舌切雀」、すべてに太宰の批判とアイロニーがあらわれる。

司：では、お一人ずつ、お名前とちょっとした感想、テーマ本を5点満点で点数づけして述べてください。

か：太宰は明るいなという印象があって、この作品でネアカと思った。読書会は3回目で、1回めの漱石はまじめな長男、今回はすねた二男の太宰、先回は夢見る三男賢治、かなと勝手に解釈。おもしろくて、5点。

い：意見をきくのが楽しくて参加しています。4点。こんなに面白いのに、なぜ死んだんだろうと思った。すばらしいのに、死んでしまって・・・と残念に思う。

伊：太宰は中高でおしまい、それ以降は読んでなかったもので、今回はすごい発見。面白い、解説も面白い。太宰はすごい。でも、ストーリーテラーは肌に合わないので、4点。（笑い）

松：いつもバツと読んでしまい残らないので、深読みができるかなと参加しています。弱視用の教科書を作るボランティアをしていて、「はしれメロス」はいつも教科書にのっていて、なんでこれがと毎回思う。「お伽草紙」は、5点。

ま：太宰は中学で読んで大学までファン。当時は「お伽草紙」は素通り。今読むとよさがわかる。「人間失格」「斜陽」が好きで、桜桃忌に行ったこともある。今になってよさを再認識した。5点+5点で10点。

み：「走れメロス」しか読んでなく暗い作者と思っていた。でもこれはすごい。いろいろ経てきて読むものだと思う。40歳前に、戦争中に、こんなこと書くななんてすごい！5点+00まるまるの二重丸（笑）。

本：いつもは千種図書館を利用している。太宰は大学卒業まで、師匠、友達、恋人だった。でも結婚して、「この世界は青春だ」と封印した。全集を2回よみ、手紙の隅々まで読んだ。太宰ときけば参加しなくてはと・・・もっと、生きて中高年の生きる指針をしめしてくれたらよかったと思う。5+5=10点。

真：2から3点。好みでいくと好きじゃない。饒舌、書き過ぎ、ここまで言うかーっという感じ。浦島さんは、本当に太宰らしいと思った。太宰はコンプレックスの固まり。太宰より太田治子が好き。

イ：5点。ほんとに面白い。おとぼけ、愚痴、批判、よくかけている。

司：では、まず、「瘤取り」から。どなたか口火を切ってもらえますか。

○：「性格の悲喜劇」とは太宰にとって都合のいい話。酒飲みでいい加減なおじいさんが幸せになったなあと。固いまじめなおじいさんは不幸になった。

○：太宰の好きな人が幸せになる。こぶが2つになったおじいさんを憎んでいたと思う。また、情景描写がいいなあと。「春の下弦の月である・・・」などと、太宰はすてきな情景描写をしていたんだと改めて気が付いた。

○：寺山修二は太宰を尊敬していて、ラジオのライターとしても活躍していたけど、この作品も導入が「ムカシムカシノオ話ヨ」などと音からはいるのがとてもいい。共通点があるようだ。

○：性格の悲喜劇といえば、こぶをもらってしまってこぶが2つになるおじいさんは私のことだ。酒飲みでふらふらした人にあこがれます。そうはなれないんで。(笑)

○：両方のおじいさんがよくかけていると思う。好意的に。奥さんと「阿波仙人」の息子だけ軽蔑してかいてある。

○：「阿波仙人」はすごいキャラだ。こういう人ほんとにいたのかな。奥さんはいそうさ。

○：「阿波仙人」なんて、太宰の創作。居たわけじゃないです。

○：二人をいやな人の典型として書いていると思う。

○：鬼はいいね、可愛くかいてある。

○：ふつう、鬼は悪者だが、なぜ悪いかは書いてない。この鬼はぜんぜん悪くないし。

○：鬼にも人間味が感じられる。人間くさい。

○：笑いをとってるんじゃないかな。

○：こぶの表現もすごい。白いひげから初日の出のようにあざやかに表れて・・・なんて。

○：なでて、水で丁寧に洗って、てかてかに光って、孫のようにかわいがり・・・。

○：太宰は、道化がテーマ。家族にも、周りの人間にも、笑わせたり、サービスしてた。そういうことじゃないかな。

司：「浦島さん」はどうでしょう。

○：亀がわからないなあ。なんなんでしょう？

○：昔話の筋からははずれている。パロディとしてははずしていないと思うけど。

○：乙姫は、どうしてあんなにそっけないんでしょう。おもしろいなあ、マイペース。竜宮城の描写もおもしろいなあ。ふしぎです。

○：乙姫が、おかしいね、何考えているのかわからないな。愛想ないし、なんなんでしょう。

○：亀にであって、あばかれていく浦島という人間、ということかな。（笑い）

○：“浦島”にいきそうな自分を、亀に批判させている、ということでしょうか。

○：亀は助けられた割には、ずうずうしいですね。ずけずけした物言いです。最後は美しく終わっていて、えっと思ったけど。

○：ほんと、最後の終わり方は、一番きれい。死んでないし、不幸にならないし。

○：太宰は、どれなんでしょう、というか、太宰は浦島さん？誰に肩入れしてかいてるのかな。

○：浦島でしょう。

○：でも、浦島は長男で、まじめで、女遊びや浪費はしない。太宰は6男で、自堕落・・・

○：浦島も亀の太宰の分身でしょう。

○：自分を全部の人にすこしずつ投影していると思う。

○：自分を追いつめて、自分を批判している。亀も自分、浦島も自分、

○：太宰には批判精神があるので、それで自分をもおいつめていくんでしょうね。

○：自死しなかった50代の太宰を見たかった。年をとればバランスがとれていただろうに。

○：この作品は戦争中の一番精神が安定していたときに書いていた。戦後は実家の没落とか、いろいろあって、やっぱり不安定になったようです。

○：壇一雄にお金を借りて、返せなくて裏切った思いから「はしれメロス」を書いたらしい。お金がなくて苦労したと思う。

○：ただ、戦後は「斜陽」がベストセラーになったりして、お金はあったろうし、安定した家庭もある。でも、不安定になっていく。芥川賞をほしがったのは、若いころで、お金がなくて、学校にもいかず、実家にも合わず顔がないとき。芥川を崇拜していたこともある。芥川の自殺にかなり衝撃をうけたようです。

○：「津軽」という小説に幼いころ育ててくれた人に会いにいく話がのっている。幼児のころ彼女にとっても頼っていて、ずっと会ってなくて、何十年ぶりの再会がさらりと書かれていて、印象的。いい情景であったようだ。

○：ただ、太宰は嘘も多い。書いてあること全部が本当ではないときがあるようです。

○：たけさんという、14歳くらいの女の子で、使用人だった。母親は病弱で面倒はみてもらえず、ほとんどたけに育てられた。小泊にたけと太宰の銅像までたっている。

○：そういうこともあって、女性に甘えたい気持ちは、人一倍強かったと思う。

司：ではそろそろ「カチカチ山」にいきましょう。

○：ふつうに、考えるとタヌキかわいそう。シンデレラも残酷だけど、ウサギも残酷。

○：ババ汁にして食べたなんて、今は書けないようだ。大人が斟酌して子どもに与えている。

○：カチカチ山は不幸な話だ。にくにくしい、冷酷なウサギにびっくりする。

○：自分にも若いころ残酷さがあったかも、16～17のころの、冷酷で潔癖なところを思い出した。

○：今の若い女の子は父親のパンツを手で触らないで、ハシでつまんで洗濯機にいれるっていいですね。もちろん、一緒には洗わない・・・

○：でも、今はもっとすすんで、そういうことも考えない。思春期も反抗期もなく、仲良し親子でワイワイやって、もっと問題だとか・・・

○：男の目から見ているね。このウサギは、女性には書けないと思う。

○：このウサギの気持ちは真実すぎて、私には、女性には書けないね。（笑い）

○：太宰は女性の気持ちは書けないと思う。

○：私もそう思う。私は太宰は女性の目線では書けない人だと思う。ひこ・田中なんかは女性の視点からよくかけている。

○：ほかにありますか、女性の視点でかいたよくかけている本は？

○：「斜陽」は和子さんという女性の目からかいていますよ。ほかに「女生徒」もある。

○：ほんとに、女性の視点から書かれているのかなあ。

○：タヌキは、すごくリアルで上手にかけている。うまいなあと思う。ゾクゾクする。

○：そりゃあ、太宰は男だもの。（笑い）

司：ではこのあたりで「舌切雀」に話を移しましょう。

○：桃太郎の下りが面白い。日本文学のことをきちんと考えていたのか、男のロマンを語っているようで、導入が面白かった。

○：桃太郎は完璧な人なので、とりうるスキがない。だから、太宰には書けないのでは。おもしろくないから。

○：奥さんが可愛そう。太宰の夫婦はみんなそう。奥さんとうまくいかずに、孤独をかこつダメな亭主とイライラする妻という図式。

○：そのほうが、設定しやすいのでは。桃太郎はその英雄像を汚してはいけないという気持ちがあって、書かない。桃太郎はすばらしくて、非難するところなし。だから、書けない。

○：潔癖な奥さんといると息がつまる。雀のお照さんという家庭がほしかったのだろう。

○：最後のところで宰相になれたのは「妻のおかげです」というのはどうでしょう。わたしは、拍子ぬけしたけど、おじいさんの素直な気持ちかなと。

○：仕返し、嫌味、とまではいかないけど、そういう気持ちだと思う。

○：嫌味だな。死んだ人には良く言うのがふつう。だけど、気持ちの底は、ガツンと嫌味でいっている。苦笑しながら。

○：おばあさんが金貨どっさりもらって生きてかえってきたら、地獄の生活が続いたろう。ほれみたことかと、おばあさんに言い続けられるおじいさん・・・(笑い)。

○：ホントの話は、なんでしたっけ？おばあさん、死ぬ？

○：いいや、大きなツツラを背負ってきて、開けたらむかでやゲジゲジやらアブやらハチやらがでてきて、刺されましたとさ、じゃなかったかな。死にません。(笑い)

○：大きなツツラを欲しがってはいけませんという教訓が、全く別のはなしになっている。ほんと、おもしろい。

太宰治ファンの新しい方を2人おむかえし、活発な意見交換をしました。

「お伽草紙」だけでなく、太宰のすべての作品が青春時代にのみ読まれるものではなく、むしろ人生を経てからこそ、その味わいを深く堪能できることがわかりました。